慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 古城の幽霊をめぐる文学誌 : クラウレン、アーペル、クライスト、フケー夫妻 |
| Sub Title | Geister im Burgschloss : über Erzählungen von Heinrich Clauren, August Apel, Heinrich von Kleist und Friedrich & Caroline de la Motte Fouqué |
| Author | 識名, 章喜(Shikina, Akiyoshi) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2021 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.1 (2021. 12) ,p.1- 23 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 識名章喜教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210001-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古城の幽霊をめぐる文学誌
## ―クラウレン、アーペル、クライスト、フケー夫妻―

識名　章喜

恋愛はするものであって、読むものではない、とは巷間よく言われる人生訓である。これをもじって幽霊譚は語るものであって、論じるのものではない、としたらどうか。本稿は啓蒙主義の洗礼を受けてなお、というより啓蒙主義の浸透によっていっそう文学としての展開の場を約束された「幽霊物語」や「怪奇小説」の起源をめぐる議論の一端に接続しようとする試みである。

### 1. はじめに「ロカルノの女乞食」ありき

「ロカルノの女乞食」が『ベルリン夕刊新聞』に掲載されたのは、1810年10月11日発売の第10号、冒頭を飾り、４頁分の紙面のほぼ８割を占めていた。mz. のイニシャル のみ記され、他は当時開催されていた美術展覧会の出品作品に関連した謎々と、目方を偽って売った泥炭販売業者についての警察報告だけである。[1]だが、この散文が話題になるのは、初出と若干異同のある形で1811年8月にベルリンの実科学校書店（レアールシュールブーフハンドゥルング）から出版されたクライストの『小説集　第2巻』に収められてからである。同年11月21日にピストル心中で世を去ることになるクライストだが、生前に刊行された２巻の小説集によって「ようやく同時代の人々に小説家として然るべき評価を受けることになった」[2]。

「ロカルノの女乞食」は、コンマやセミコロン、コロンの多用によって息長く続く20のセンテンスによって構成され、居城に保護した物乞いの老女の死とその後城の客間に物音だけで現れる幽霊とそれを確かめようとして恐怖のあまり狂気に陥り、城に火をつけて破滅する城主の侯爵の悲劇的顛末が一気に語られる。

クライストの文体の見本のようなこの掌編の魅力については、エミール・シュタイガーによる詳細な分析を嚆矢として、見当はずれの解釈も含めすでに語りつくされた観がある。[3]

この短篇がロマン派時代の幽霊小説の形式や文体に大きな影響を与えたことも、これまで再三指摘されており、「お化けのホフマン」の異名でこの手のジャンルの代表的書き手と見なされたE.T.A.ホフマンも「ロカルノの女乞食」にたびたび言及している。『ゼラーピオン同人作品集』における「吸血鬼伝説」をめぐって議論が沸騰する場面（第４巻、８節）で、同人の一人のロータルは、「思うに、幻想はじつに単純な手段によってかきたてられるし、恐怖は幽霊現象にあるというより、頭のなかにある」と述べ、「ロカルノの女乞食」について、「存在しうるなかでも最も恐怖を煽るものを含んでいながら、その発明はなんと単純であることか！」と恐怖の演出の単純さに触れ、「完成された巨匠の天才性」を発揮する「クライストにかかれば、吸血鬼を墓からはい上がらせる必要などない、物乞いの老女一人で十分なのだ」と、この短篇を幽霊小説のお手本と称賛してやまない。[4]ホフマンの評価から看てとれるように、「ロカルノの女乞食」は「最初の〈古典的な〉ドイツ幽霊小説として」、後の作家の多くがお手本にし、この作品を基準にした、規範的な、きわめて影響力の強いテクスト」となって、ドイツ幽霊小説史のなかで特別な位置づけをされた点であろう。[5]ことほどさように、ドイツ語版でも日本語訳でもドイツの幽霊・怪奇小説のアンソロジーに必ずと言ってよいほど収録される定番作品でもある。[6]

これまでの実証研究により、クライストは友人のエルンスト・フォン・プフエル（Ernst von Pfuel）から聞いた冒険譚を基にしたと言われている。プフエルの弟のフリードリヒが、ギールスドルフの年老いた伯父のもとで体験した実話だという。ほかにフェルディナント・グリムがプフエルの話を基に書き留めたボヘミアの幽霊譚、もしくは1810年の『直言居士または教養ある偏見なき読者のための娯楽紙（Der Freimüthige oder Unterhaltungsblatt für gebildete, unbefangene Leser）』に掲載の小説が参考にされた可能性も指摘されている。[7]

ここで改めて注目したいのは、後者すなわち1810年の『直言居士（デア・フライミューティゲ）』の小説であり、後年、人気作家として大衆小説を書きなぐったハインリヒ・クラウレン（Heinrich Clauren: 1771～1854）の短篇「灰色の客間（Die graue Stube）」のことである。この先行作品についてはゼムプトナー編纂の全集では「とある浅薄な

小説（eine seichte Erzählung）」とだけ記され[8]、佐藤恵三訳の『クライスト全集』では参照の可能性として「灰色の部屋」と題名への言及はあるものの、クラウレンの名は挙げずに、『フライミューティゲ』誌に載った「浅薄な小説」と、ゼムプトナーの註釈と同じ言葉で評している。ただ作者をクラウレンとしていないのは、初出時が匿名でH. C.とのみ記されていたからである。この経緯については後述する。さらに佐藤はその掲載日を４月９日号と５月３日号の２回にわたって分載されたとしているが、これは正確ではない。[9]まず「灰色の客間。文字通り本当にあった話」が『直言居士（デア・フライミューティゲ）』の４月９日と10日の第71、72号に掲載され、かりにこれを前半部としておこう。その後5月3日から5日にかけて再び「灰色の客間」なるものが『直言居士』第88～90号に連載された。これを後半部とする。日付と号数から『直言居士』はほぼ毎日発行される新聞のような媒体であったことが分かる。[10]

本論ではこの「浅薄な小説」こそが幽霊小説普及の鍵になったのではないか、という仮説から、城館に出現する幽霊の文学誌を祖述する。「灰色の客間」と趣向の似通ったクラウレンの別の短篇「野盗（おいはぎ）の城（Das Raubschloß）」(1812)については、E. A. ポーの「アッシャー家の崩壊」との関連ですでに論じたことがあるので、ここでは深入りしない。[11]

## ２.ハインリヒ・クラウレンの「灰色の客間」

「灰色の客間」発表前後のクラウレンの文学界での位置について、伝記的な事実を確認しておこう。[12]

ハインリヒ・クラウレンは筆名で、本名はゴットリープ・ザームエル・カール・ホイン(Gottlieb Samuel Carl Heun: 1771~1854)、ニーダーラウジッツのドブリルクで生まれた。H. Claurenがよく使っていた形だが、Carl Heun のアナグラムであることはよく知られている。父親はザクセン選帝侯国の御料地監督官として騎士領を管理していた。息子のカールはゲッティンゲンとライプツィヒで法律を学び、1791年にライプツィヒで法学博士の学位を取得、その後は父親と同じく高級官僚の道に進むべくベルリンに上京した。まずフォン・ハイニッツ大臣の私設秘書となり、1792年には政府内で枢密秘書官の地位に就き、後に鉱山監督部の管理官に異動した。1801年から1810年まではプロイセン貴族の所有するポ

ーランドの所領の管理を代行するのと並行して、書籍商および『イェーナ一般文芸新聞（Jenaische Allgemeine Literatur-Zeitung: 以下JALZと略記する）』の共同編集者としても活動していた。JALZは、ゲーテやシラーともゆかりの深いドイツ文壇の重要な批評機関となった媒体だが、クラウレンは出版業界の事情によく通じていた。事実、ゲーテの最初の8巻本作品集を刊行し、シラーの作品の多くを世に送った出版人として有名なライプツィヒのゲオルク・ヨアヒム・ゲッシェン（1752〜1828）の妻ヘンリエッテ（1765〜1850）は、ホインの姉にあたり、18世紀末からの〈読書熱〉によって振興著しい出版界の大物が義理の兄という関係だったのである。ただこの時期のゲーテの書簡にも、シラーの書簡にもクラウレンことカール・ホインの名前が出てくることはない。1810年にクラウレンはベルリンに戻り、1811年にはプロイセンの首相としてフランス占領下で改革を進めていたフォン・ハルデンベルクのもとに就職、1813年には宮中顧問官にまで出世している。対ナポレオン戦争の1813/14年にはプロイセン軍の非戦闘員の官吏として参加、軍営の野戦新聞の発行に関わり、その功績により鉄十字章も授与されている。ザクセンに生まれながら、ライン同盟の一員としてナポレオン側についたザクセン王国ではなく、ナポレオン占領下のプロイセンでキャリアを積んだのは、生地のドブリルクが、ザクセンとプロイセン両国の辺境にあたり、地域の帰属が18世紀末からプロイセンに移っていたことも関係していよう。

さて書籍商やJALZの共同出資者・編集者として文芸メディアに関わっていたホインの作家としての活動の端緒と言えるのが、プロイセンの首都ベルリンを代表する文芸紙『直言居士』に1810年に匿名で載せた「灰色の客間」である。ホイン＝クラウレンにとっては初期の、流行作家となる前の代表作にあたる。ただ『直言居士』紙にはH. C.名の短篇が少なからず掲載されているので、常連執筆者だったと思われる。1812年にはポーにも間接的に影響与えたほぼ同じ趣向の短篇「野盗（おいはぎ）の城」をエルフルトで刊行された『休養娯楽（Erholungen）』誌6月第22号に掲載している。

「灰色の客間」は事件が起こる前半部とその謎解きの後半部の２部構成をとり、物語は冬のさなかに、とある領主夫人のお供をした秘書官トービアス・ブレンダオなる若者が、14歳まで世話になった御料地監督官ルンペルの屋敷を7年ぶりに再訪するところから始まる。領主夫人のイタリア旅行の途上で立ち寄った場所から7マイルほど離れた距離に幼少期の故郷があった。雪嵐のなかを主人公は

やっとの思いで目的地に辿りつくものの、夫人や子どもたちは近隣の町に出かけており、城館には主人のルンペル氏と使用人しかいなかった。ブレンダオ青年は屋敷の通称「灰色の客間」に泊まることになる。この城では昔から〈城の令嬢(Burgfräulein)〉ゲルトルーデの伝説がまことしやかに語られてきた。

美しいゲルトルーデは黒騎士フーゴ伯爵によって、例の「灰色の客間」で処女を奪われ、子まで身ごもってしまう。修道院で研鑽をつむ予定だったゲルトルーデがこの秘密を修道僧に告白すると、彼は修道院への入門を拒否、神を誘惑したのだから、業火の責め苦を300年にわたって耐え忍べと宣告する。絶望したゲルトルーデは「灰色の客間」で毒をあおぎ19歳の若さで亡くなった。司祭が定めた300年の期日まであと30年残されているため、それまで「灰色の客間」に彼女の幽霊が現われつづける。この話を主人公のブレンダオも幼いころから聞かされてきた。

御料地監督官がこの地を担当するようになってから、来客用に部屋を整えたものの、「奇妙なことに誰一人客はその部屋に泊まろうとせず、また誰一人としてそこでぐっすり眠ったものはいなかった。」[13]

ブレンダオ青年はもうこの手の迷信を信じる齢ではなく、「灰色の客間」で眠ることになったが、塔鐘が12時を告げる音に眼を覚ますと、城の令嬢ゲルトルーデが死に装束で、左手に十字架、右手に短剣を持って立っている姿を目撃し、恐怖のあまり金縛りにあう。以下少し長めの引用になるが、恐怖の演出を追ってみよう。

> ブレンダオは自分を抑えられなくなっていた。全身の脈動が止まるかのようだった。おぞましい女は寝台の帷を払いのけ、彼女の虚ろな眼が凄まじい視線と化したのは、寝台に男がいたのに気づいたからだった。すばやく城の娘は短刀をフーゴと思い込んだブレンダオの胸めがけて振りおろした。この瞬間毒液がゲルトルーデの手からブレンダオの顔に飛び散った。
>
> 不安に駆られたブレンダオは大声で叫んだ。最後の力を振りしぼり、一気に寝台から跳びおり、窓に急いで助けを求めようとした。だが恐ろしい女は逃れようとする男に追いついた。彼女は窓に片手を置き、ブレンダオが窓を開けられないようにした。もう一方の手で女は不幸なブレンダオに抱きついた。再び彼は絶叫した。というのも墓から出てきたような女の腕に抱かれ、

背中全体に死人の冷気を感じたからだった。まさしく棺桶の中にいるような感触だった。女は十字架も匕首ももう手には持っていなかった。ブレンダオの命を奪うことが女の目的ではなさそうだったが、狙いはもっと怖ろしいことに、ブレンダオの愛だった。この氷のように冷たい女はブレンダオをがっしり抱きしめたが、その冷たさは300年に及ぼうかという業火でさえ暖められないほどに思われ、ブレンダオは女の腕のなかで凍りついた。

ブレンダオは身をはがし、入室したときのドアへと駆けよった。ドアには骸骨が立っていた。骸骨は右手でドアの取っ手をつかみ、小さな中空のされこうべがブレンダオに面と向かってにやりと笑った。この骸骨こそフーゴ伯爵、なんともおぞましい姿になっていたのだ。ドアから中に入ってきたようだった。その背後でドアの閉まる音がした。とてつもない轟音が家全体に響いた。おどろおどろしい骸骨がブレンダオに迫り、ゲルトルーデは床に倒れ、灯りが消え、ブレンダオは寝台に逃れ、耳までかけ布団をかぶった。

彼は身動きしなかった。灰色の部屋は死んだように静まりかえった。布団の中は煮えたぎるように熱かった。汗が皮膚の穴から吹きだした。しかしブレンダオは何があっても布団から頭を出そうなどとは思わなかった。ようやっと—自然の力はブレンダオより強かった。彼は眠りについた。[14]

主人公は朝になると、世話になった人たちにさようならも告げずに、城館をあとにした。「ブレンダオは良心的な信頼のおける若者だったが、この一件を物語る言葉の一つひとつに、自分の名誉と命にかけて嘘偽りはないと言ったのである。」[15]この一文で前半が締めくくられる。前半というのは初出時、『直言居士』紙４月９日、10号（合冊頁では281頁以下および286～288頁）の「灰色の客間」である。ここまでのところで完結していれば、城の部屋に出現する彷徨える不幸な死を遂げた女霊の恐怖を描いたまぎれもない幽霊・怪異小説ということになろう。

だが後述するようにこの短篇の文芸紙への掲載に憤った読者が少なからずいた。ライプツィヒで活躍した作家J. A. アーペル（Johann August Apel: 1771～1816）もその一人だった。[16]アーペルの短篇「黒い部屋。逸話。（Das schwarze Kammer. Anekdote.）」はクラウレンの「灰色の客間」のパロディである。「黒い部屋」冒頭部では小さな町の読書サークルのメンバーが紹介される。語り手の

「私」と町医者、会に遅刻している裁判所書記の3名である。各自が購読している新聞雑誌を持ち寄って朗読し、批評するのが習わしになっている。裁判所書記が学者・教養人向けの媒体、医者はやわらかめの『エレガントな世界のための新聞』を担当し、「私」はその両者の傾向を合わせた新聞として新着のゴータで出版された日刊紙『ドイツ人の一般報知（Allgemeiner Anzeiger der Deutschen）』の記事を紹介する役割分担になっている。そこで「私」は『直言居士』紙に掲載された「灰色の客間」に対する『一般報知（アルゲマイナー・アンツァイガー）』の批評子の辛辣な非難に言及し、こう持論を展開する。「私は前から『直言居士』紙の編集姿勢が不思議でならなかった。この媒体はふだんは現実志向で、その上ベルリンではばりばりの啓蒙主義で鳴らしているのに、よりによってこんな話を載せて、自分の雑誌を反啓蒙の宣伝の道具にするとは。私が『直言居士』紙がどう言い訳するのか興味津々だよ。」[17]

しかし「灰色の客間」にはさらに続きがあった。後半部は『直言居士』紙では5月3～5日号（合冊頁では349頁以下、355頁以下、357頁以下）と三日続けての連載となったが、ここではブレンダオの友人の「私」が語り手として登場する。[18]この友人はブレンダオの話に興味をもって御料地監督官の屋敷に用事にかこつけ自ら赴く。到着後すぐに川の堤防の決壊したとの知らせが入り、父親の監督官と息子が馬で外に出ると、「私」も「母親とロッテ嬢」と一緒に周辺の状況を一望できる階段を三階分登った高さの「灰色の客間」に案内される。「明るい陽の射す白昼でさえ、灰色のこの広間にはどこか人を寄せ付けないところがあった」が、「私」もあらためて「青ざめたゲルトルーデに立ち向かう」意を固める。その部屋に宿泊できないか訊ねると、母親とロッテ嬢が思わせぶりな視線を交わしあい、見晴らしはいいが、暖房もないし、風がうるさい、と部屋の難点をあげつらう。結局「私」の希望は受け入れられた。夕食後、「灰色の客間」に泊まることを知った監督官の父親と息子たちも驚きを隠さない。そこで「私」はブレンダオの名前は出さずに灰色の部屋での幽霊体験談を打ち明ける。監督官の家族も怖がって引っ越してしまわないか配慮したのである。いよいよ寝る段になって、一家の人々がまたも思わせぶりな視線を交わすのに気づく。「私」は小間使いのブリギッテに一緒にしばらくの間話し相手になってもらえないか持ちかけるが、「1000ターラー積まれても」嫌だと断られる。

「私」は念のため二丁用意したピストルに弾をこめ、「禍々しい広間」の隅々を

点検する。寝台の下も念入りに調べ、仕掛けのないことを確認し、窓やドアを閉めていると、牢獄等の回廊に続く大きなガラス戸越しに「あの忌まわしい骸骨」となった「黒騎士の伯爵」が片手の剣を握って近づくのが見える。ピストルの引き金を引いたが、発射できず、「私」はドアに閂を降ろし、友人ブレンダオが寝たのと同じ寝台にもぐりこんだ。燭台の火を消さずにしばらく横になっていると、悪寒で眼が覚め、砂の上を足を引きづって歩く音が聞こえ、回廊から男女の「悪魔じみた笑い声」が響き、「私」はそれがフーゴとゲルトルーデの幽霊だと確信し、恐怖のうちに寝入ってしまう。

朝になって、「私」は一家の人々に、ようやくブレンダオの体験と自分の昨夜の恐怖を話して説明を求めると、みなが「腹をかかえて笑い転げんばかり」のありさまだった。

ここでようやく種が明かされる。監督官の娘のロッテ嬢は悪戯好きで、子どもたちは幼い頃から臆病な従弟のブレンダオをいつもからかっていた。そのブレンダオが７年ぶりに帰ってきて「啓蒙主義思潮の空気を吸って」自分が成長したのだ、と父親に吹聴したので、ロッテ嬢がブレンダオを試すアイデアを思いついた。ブレンダオは昔から眠りが深く、どんな音にも眼を覚まさないことを知っていた三人の子どもたちは、ガラス戸に嵌めていたガラス板を割って閂を外し、靴下で足音をたてないように、家庭教師が人体説明用に使っていた骸骨を部屋に運び、ロッテ嬢はゲルトルーデの死に装束で、左手に十字架、右手に大きな氷柱（つらら）を持ち、三人がそれぞれ配置について塔の鐘の12時を合図に、ロッテ嬢が「濡れた腕の死人のような冷たさ」でブレンダオを驚かせたのである。寒気がしたのは氷を枕の下に置いたからである。ブレンダオが父親の監督官に例の一件の前に「私」を訪問すると話していたため、おしゃべりなブレンダオなら当然「私」に話していたものという前提で、「灰色の客間」に泊まりたがる「私」の挑発にのって、子どもたちは一芝居をまたうつことに決めたが、「私」がピストルとサーベルを携帯したことでロッテ嬢は計画を変更したという。ピストルの故障は息子のカールが先回りして、銃の火薬皿を濡らしていたからだった。

以上が「灰色の客間」の概略である。1810年の4月9/10日に前半部が、後半部はほぼ一か月おいて5月3/4/5日の『直言居士』紙に掲載されたのだが、4月分の前半については先にアーペルが挙げた『一般報知（アルゲマイナー・アンツァイガー）』紙のような批判が巻き起こり、これに対してクラウレンも反論を試みたようだ。ここではマルクス・ベ

ルナウアーの記述に沿って経緯を辿ってみる。ゴータの書店主で啓蒙家だったルドルフ・ツァハリアス・ベッカー（Rudolph Zacharias Becker: 1752-1822）の編集する『一般報知』の1810年第119号（5月3日）に、クラウレンの幽霊物語についての署名のない批判的な文章が掲載された。そこでは一般的に超自然現象を信じさせる類の物語全般を否定し、民衆の啓蒙どころか、民衆の素朴な感覚に訴えて迷信の闇に引きずりこむものだと攻撃した。クラウレンの短篇については「理性的な男ならこの手のまやかしに何と言えばよいのだろう？　微笑むのがよいのか、ため息をつくのがよいのか？　微笑むとすれば、大衆の群れに、高みからの光も視えぬまま暗闇に座っているのが子どもにほかならないと分かってのことか。子どもには暇つぶしに乳母が幽霊や魔女や魔法の話を聞かせてやらねばならない。だがため息をつかざるをえないのは、有害な結果を憂慮してのことだ。われわれの時代の未成年の、感覚的で、神経の弱い人間にはそこから有害な影響が出てしまう。この文章の著者に筆をとらせた結果はこうだ。とある実直な男が言ったとする。自分は例の幽霊物語を晩に細君に読み聞かせた。それは結末が迷信の破壊につながるものと思っていたから。だが全体はまったく正反対になって物語は妻にあまりに深い印象を与えてしまったため、彼女は一晩中極度の不安で眠れず、幽霊に対する恐怖心がいっそうつのることになった。」[19]

この批評子は幽霊物語の書き手を正統派のカトリック信者と推定し、さらに5月12日発売の第127号では、A.B.と署名された批評子が、「灰色の客間」の匿名のままの著者に名前を明かすように求めている。つまり『直言居士』紙に「灰色の客間」が掲載された当時は匿名（H. C.と略記のみ）とされていたのである。これは同年10月11日に「ロカルノの女乞食」がmz.名で発表されたときと同じである。ただ種明かしの後半部が掲載され、『一般報知』の批評子は5月23日付けの第138号で、前言を撤回した。それでもなお幽霊物語については「どうして黙殺してしかるべきテーマを言葉にする必要があるのだろうか？」[20]と疑問を呈している。

これに対し『直言居士』紙の第153号（8月2日）でH. C.氏（すなわちクラウレン）も次のように弁解している。

> あの散文での私の意図はこうだ。まず第一に、『直言居士』紙の読者に、灰色の客間でブレンダオが体験した少なからず面白い物語を通して楽しんで

もらうことであり、次にはこの手の出来事が、よくわけの分からない闇に包まれていても、結局は自然の現象として説明できることを主に示したかった。

物語の解明を私はわざと次の発売まで延ばしたのは、勘の鋭い読者に、事態をじっくり考えてもらい、それが悪ふざけかいんちきであると結論づけてもらうためであった。その結末で盲目的な思い込みで事態の流れをろくに吟味もしない思考の弱い読者には自らを恥じてもらうためである。

『一般報知』の第138号で〈某〉氏が再び舞台に帰りざいて、『直言居士』紙の編集者に自ら〈父よわれ罪を犯せり（pater peccavi）〉と宣言した。これは『直言居士』にとっては名誉なことである。

しかしながら、この批評子によって展開される原則論に私は同意できない。批評子はこう書いている。「この手の物語は言葉にすべきではない。なぜなら幽霊現象とされたものが後で解明されたからといって、小説がいったん与えてしまった印象を払拭できないからだ。」

私から言わせれば、超自然的なものへの信憑をうまく失わせることができるのは、幽霊物語を本当のことのように活写し、それからヴェールを剝いでみせるよりほかに良い方法はない。そうして、どんな子どもでも起こっていることの自然な連関を見落とさないようにしてやるのだ。読者がその結果自ら幽霊現象に遭遇したとき、初めのうちこそ超自然的に見えようが、小説で示された自然な解釈を思い起こし、超自然的に見える現象に落ち着いてよく考え抜いた態度で臨めるのだ。[21]

ここでクラウレンは執筆当初から狙いは幽霊現象の啓蒙主義的な解明にあり、二部に分けたのは、読者を試すためだったと主張している。この論説によって『一般報知』との間の幽霊物語論争は終了する。春から夏まで続いた論争は当然クライストも承知していただろう。クライストは慎重に匿名を装い、あえて自然現象として解釈できない宿命の物語として、あるいは貴族の最下級層への冷酷な仕打ちの因果として「ロカルノの女乞食」を『ベルリン夕刊新聞』の冒頭に載せたとも言える。その前の号では当時開催された大掛かりなベルリンの美術展を扱い、その前の第5号では「1809年の国王のベルリン御帰還を寿ぐ頌歌」、その前の巻頭記事は「ベルリン大学新設にあたっての率直な意見」であり、10月11日

の第10号の「ロカルノの女乞食」は虚構の小説としても、とても不釣り合いな印象を与える。読者はむしろ異国（イタリア）で起こった謎の事件くらいに思っておかしくない。虚構の幽霊物語として読めば、当然『直言居士』紙が受けた批判を覚悟しなければならなかったろう。ちなみにクライストは自ら主宰した『ベルリン夕刊新聞』の廃刊に至る（1811年3月30日）前後、3月25日から4月5日まで、『直言居士』紙に短篇「聖ドミンゴ島の婚約」を連載している。1810年の10月から夕刊紙を立ちあげるにあたっても、彼は『直言居士』紙の動向を十分意識していたにちがいない。

## 3．アウグスト・アーペルの「黒い部屋」

クラウレンの「灰色の客間」の影響は、『一般報知』との論争を挟んで、先に少し触れたアーペルのパロディ作品「黒い部屋」に受け継がれる。この掌篇はアーペルがフリードリヒ・ラウンと連名で翌1811年に出版した『幽霊綺譚(Gespensterbuch)』の第２巻に収められた。『直言居士』紙の「灰色の客間」を念頭に置いた書き出しについてはすでに述べた。語り手の「私」は見習いの「代用教員」で、『一般報知』紙と意見を同じくする啓蒙派だが、町専属医のベールマンは自然界にはいまだに解明できていないことが多いという立場だ。彼は自分も「『灰色の客間』のブレンダオの身に起こったようなことを経験」(147)[22]した、と語りはじめる。それが医師になりたての頃、往診のために彼の泊まったフォン・ジルバ―シュタイン大佐の城館の「黒い部屋（Die schwarze Kammer)」の話である。大佐の娘が熱を出し、その治療に呼ばれ、やむなく一泊することになったベールマン医師は「全体がかなり陰鬱な感じの」「城内でも一番居心地の悪い」部屋に通される。「一世代昔の重たいドアは黒く塗られ、羽目板張りの天井や窓下の壁の木材も同じように黒く塗られ」、「私が好ましく思ったのは雪のように真っ白なシーツを張った寝台だけだった。」(147) そこへ少佐に仕える猟師の青年が用はないかと訪ねてくるのだが、「黒い部屋」をめぐる幽霊の話や自分が部屋にとどまっていい、とか自分の部屋の寝台を使ってもらってもいい、などと申し出るものの、医師は沽券にかかわると思い断る。

疲労で早く寝入った医師は突然耳元で自分の名前をささやかれて震えあがる。「アウグスト！」と名前を呼ぶ声がはっきり聞こえ、眼を半分開けて見ると、部

屋の様子が一変していることに気づく。

> 氷のように冷たい手が私に触れてきて、寝台の私の隣には死に装束の青ざめた人物が横たわり、私の方に冷たい腕を伸ばしてくるではないか。私は驚愕のあまり大声で叫んでしまい、反射的に身をかわしたが、その瞬間強い衝撃が走り、例の人物は消え去った。私の周りには何もなく、つい先ほどまでの闇があるだけだった。私はかけ布団を顔までかぶった。城塔の鐘が時を告げ、その回数を数えた。真夜中だった。(148)

腑に落ちない医師は燭台に火を灯し、部屋を点検する。ドアも窓もしっかり閉められていたが、寝台を照らすとそこに「長く美しい濃い目の巻き毛が一本落ちて」いるのを発見する。ちょうどそのとき、城内がにわかに騒々しくなり、城の令嬢の危篤が告げられ、医師は急いで駆けつけるも、彼女は「真夜中になるほんの少し前、眠りから覚めると、荒い息を繰り返しながら亡くなった」(149)という。さらに「私がぞっとしたのは、死者の頭から豊かに垂れ落ちた長いブルネットの巻き髪が、夜自分の部屋で見たのとまったく同じだったからさ。私は翌日から重篤な病にかかった。いいかい、私の患者だったご令嬢の死の原因となったのと同じ病気になった。」(149)これが読書仲間の医師が真剣に語った体験談である。これがきっかけで医師は幽霊現象を信じるようになったのだが、懐疑的な語り手の「私」に批判の矛先を向けたちょうどそのとき、仕事で会に遅れた裁判所書記のヴェアムート氏が登場する。書記は遅刻した理由が送検されてきた一組の若いカップルの聴取のせいだと言い訳する。医師が『直言居士』紙の「灰色の客間」をめぐって論争していたことを告げると、書記は『直言居士』紙に「黒い部屋」という題で「灰色の客間」とは正反対の幽霊話を投稿してもいい、と返すので「私」と医師は驚く。

裁判所書記は弁護士のティッペルなる人物がジルバ―シュタイン家の所領裁判所の公判に出た後、夜も遅くなったのでお城に泊まることになった。ところが朝になっても姿を現わさないことを不審に思った家の人々が弁護士の泊まった「黒い部屋」をこじ開けると、「死人のように青ざめ、意識を失って寝台に横たわる」(150)ティッペルを発見する。意識の戻ったティッペルは昨夜の顛末を話はじめる。「できるだけ壁際に身を寄せ」(150)うとうとしていると「鈍い物音

で」眼が覚め、自分の泊まった客間にはなかった簞笥の前に白い人影がいて、金銀や宝石を手にとっているように見えた。その人影は「小さく青ざめた死者の顔で、黒髪をひと昔前の髪紐で結わえ」(150)、かびの染みのついた経帷子を脱ぎ捨て、ティッペルの寝台に入ってきた。すると激しい音とともにティッペルは気を失った。

この一件は屋敷で騒ぎとなった。ジルバ―シュタイン家の人たちは自分の屋敷に幽霊が出るなどという話を嫌い、管轄の裁判所長もそういう話を信じない人で、ティッペルの話の真偽を確認するため「黒い部屋」での現場検証を始める。部屋には簞笥など存在しなかったが、寝台を動かすうちに壁がからくり仕掛けで音を立ててはねあがり、寝台が隣室の寝台とつながっていることが判明する。隣室は小間使いの部屋で、簞笥には宝飾品やお金を巻いた束が見つかった。この小間使いはジルバ―シュタイン中佐の猟師アウグスト・ライゼガング（原文ではLeisegang、「抜き足差し足」というような意味）と一緒に姿を消していた。この二人は逮捕され、裁判所書記がその事情聴取をしていたという顛末が明らかにされる。

以上がアーペルの「黒い部屋」のあらましである。幽霊話と思ったところが、実は単純な裏があったというクラウレンの短篇の前半と後半を一つにまとめた形になっている。唯一トリックらしいトリックは、二つの部屋の間の壁が可動式になって、壁越しに二つの寝台がつながる、「大昔には城主の役に立ったらしい」（152）日本で言えば、大名屋敷の隠し部屋のような仕掛けである。クラウレンの短篇が引き起こした幽霊物語論争を暗示しているのが、医者のアウグスト・ベールマンが弁護士のティッペルと同じように猟師の若者と小間使いにかつがれた事情に納得して後の一節である。

医者はこう言って、恒例の読書会を続けようとする。「君たちに話した私の体験談〈黒い部屋〉が作品にはならないとしても、『灰色の客間』を論じないでおくわけにはいくまい！さあ読んでみよう！」（152）医者が『直言居士』紙を手にとると、「灰色の客間」の題が眼に入り、「これは古いやつだな！」と声をあげる。つまり医者は「灰色の客間」がすでに議論された既出の作品（つまり前半部）で完結したものと思っている。しかし他の仲間が「確かめると、日付は新しかった。」つまり最新号が机の上にあったのである。

医者は読みはじめた。だが最後まで読み終えずに、乱暴に新聞を机に放りなげた。そこにはほかならぬお天道様もびっくりの種明かしが書かれていたからだ。あのさんざん叩かれ、悪評ふんぷんたる「灰色の客間」の種明かしが。(152)

ここでアーペルは、いかにもロマン派の時代にふさわしい、合理的な解明になんの面白さも見いだせない、どこか幽霊物語を信じたい両義的な心理を覗かせる。医者に「私たちは悪い時代に生きているもんだ！古きものは何もかも滅び、まっとうな幽霊さえもう生きのびられない」と嘆きの声をあげさせる一方で、裁判所書記と語り手の「私」がこう反論する。「幽霊どもが退散したからこそ、時代は幽霊物語にぴったりなのさ。どの物語にも裏の現実（hinter der Wirklichkeit）があるなら、読者はそれを読んで、運が良ければ、裏の真実に(hinter die Wahrheit)たどりつけるのでは！」(152)

読書仲間で幽霊物語に懐疑的な二人の皮肉を交えた最後の発言は、19世紀以降に定着していく「怪奇小説」や20世紀の「ホラー」というジャンルの起源をめぐる示唆に富んでいる。かつてロジェ・カイヨワは、幻想の発動が「現実界の堅固さを前提」とし、「現実が堅固であればあるほど、幻想による侵害も威力を増す」[23]と述べ、西洋近代における幻想小説の興隆の背景を説明する。「幻想文学」の目指すところが「恐怖とのたわむれ」にある以上、「亡霊を登場させる当の作家たちが自分の創り出す幻の存在を信じていないことが、必須の条件」となりうるのである。カイヨワによれば、啓蒙期の終焉とともに、ヨーロッパ各国でほぼ同時期に「不可思議の華々しい抬頭」があったのは、「幻想小説に特有の恐怖」が、「自然の法則が確固として不変のものとみなされている世界、懐疑心の旺盛な世界でのみ威力を発揮するものであり、暗黒の力や彼岸の国からやって来る存在に容易に影響されていた世界への郷愁、ないしは、そうした世界からの脅威といった形式で出現するもの」だからである。[24]アーペルの短篇の結びに示されるように、「幽霊どもが退散したからこそ」幽霊物語の時代が到来した、という認識が、反啓蒙主義の立場をとったロマン派の影響を受けた作家たちの間でも広く共有されていたのであろう。クラウレンもそのパロディを書いたアーペルも、楽しんで書いている。そこにクライストの「ロカルノの女乞食」が加わって、古城の幽霊をめぐる話型がさらに活況を呈するのだ。

## 4. フリードリヒ・ドゥ・ラ・モット・フケーの「城の中庭の燈火」

クライストの「ロカルノの女乞食」とほぼ同じ設定で、簡潔なクライストの文体を説明的に粉飾したのが、フリードリヒ・ドゥ・ラ・モット・フケー（Friedrich de la Motte Fouqué: 1777～1843）の短篇「城の中庭の燈火（Die Laterne im Schlosshofe）」（1814）である。クライストが北イタリアとすれば、フケーはイギリスのゴシック小説を意識して「スコットランド高地のさる荒涼とした地方」の城砦を舞台にする。フケーの短篇の城主は身分の低い美男子と駆け落ちしたまま行方不明になった娘の思い出と悔恨を胸にしまい、暮らしている。男は城の近くの谷底に落ちて死んでいた。そこへ燭台を手にした老女が物乞いに訪れる。なかなか立ち去らないので猟犬で追い立てようとすると、なぜか犬の群れは老女の前で躊躇する。このとき城主は何かに思い当って驚愕し、使用人たちは幽霊のごとき外見に怖れをなして、施しをする。クライストの短篇で示された侯爵の罪（女乞食への無慈悲な応対）に対応するのが城主の出奔した令嬢へ屈託であり、共通点はよろめき歩いて物乞いをする老女と城の番犬である。この最初の出現から、晩になるときまって三日に一度、老女が城の中庭に燭台を手に現われるようになる。「燭台が暗闇のなかで奇妙に揺れはじめ、同時に庭の角石の上を弱々しく進む覚束ない足音が聞こえてくると、城主は窓から後ずさりし、使用人たちは食糧品を詰めた籠を外に置き、犬たちは幽霊がいなくなるまで、哀れな鳴き声をあげつつけた。」[25]

その後冬の初めに、城主が荒れた山に狩りに出かけたおりに、猟犬たちの異常な動きから、山の中腹に洞穴を発見する。そこで城主が目撃したのは「不審の念を抱かせるほど豊かな、雪のように真っ白な髪の毛が風にあおられている、あの女」だった。城主は恐怖に襲われ大慌てで逃げ帰る。この一件以降、中庭に燭台の老女は現れなくなった。城主がまた狩りに出かけると、迷い込んで再びあの洞穴に至った。城主が猟犬の後を追って洞窟のなかを進むと、女の屍があった。「城主が近寄ってみると、誰あろう！白髪は明らかにあの怖ろしい、燭台を持つ女のものだった。そのそばには動物の角を使った小さな燭台が置かれていたが、顔の特徴は城主の一人娘のそれであった。」[26] 遺体の胸の上には父に宛てた書置きがあり、愛する人の転落死を悲しむあまり三日で真っ白になった髪のことや、自らの罪を悔いる言葉が自らの血で記されていた。

先に説明的な文体と述べたのは、クライストがロカルノの城で老女が幽霊となる因果について一切触れていない一方で、フケーの掌篇では燭台を手にした老女は、幽霊じみてはいても、そもそも幽霊ではなかったために、より具体的に因果関係を明らかにする語りで構成されているからである。フケーは意識的に「ロカルノの女乞食」をお手本に選び、城館、老女の足音、犬の諸行動や鳴き声といった共通項を媒介に、いわば細部に謎を秘めたクライストのテクストを、フケー流に解釈し直しているかのように見える。フケーの作品では、燭台の女が現れなくなると、逆に、女がいつ現れるのかを待ち望む「奇妙すぎる期待」に城主自身がそわそわし始める。「そのために城主は外見からもみるみる青ざめ、乱心している様子だったので、城の住人たちの多くは、あの老女の出現が城主の死を暗示するものだと思った。」[27] つまりフケーの物語の面白い点は、裏の事情を薄々感じとった城主にとって、女の「出現（Erscheinung）」は忌避されるものではない一方で、使用人たちは女を不吉な「幽霊（Erscheinung）」とみなして、主人である城主の死に結びつけているところにある。城主は娘の死を知ったからといって、クライストの侯爵のように劇的な最期を遂げない。結末はむしろ抒情的、まさにロマンティックと呼びたいほどだ。

> 城主は娘を洞窟に埋葬させ、以後二度と外には出てこなかった。不幸な隠者となった男はなにもかも身のまわりから遠ざけたが、彼に忠実な犬たちまでは追いだせなかった。犬たちは洞窟の外に居座り、若い女主人の墓と喪に服す城主を見守りつづけた。城主が亡くなったとき、犬たちの不安げな遠吠えが、真っ先に周辺の地域にその死を告げたのである。[28]

フケーの「城の中庭の燈火」もクライストの「ロカルノの女乞食」同様、きわめて短い掌篇の長さのなかに、宿命の時間が凝縮されるが、クライストの幽霊が女乞食の死から数年経過し、客間として改装後の部屋に現われるのに対し、フケーの老女＝娘は出奔後、恋人の不慮の死を通し、悔い改めていることを人づてに父親の城主に知らせながらも、その時間経過は示されず、物乞いとして三日おきに城の中庭に現われるのは、秋から、洞窟で発見される初冬までの限られた期間である。結果としてフケーの老女は幽霊ではないので、この作品を厳密な意味での幽霊物語とすることはできないものの、クライストの道具立てに拠った点で、

読者に幽霊物語としての展開を期待させ、一定の不気味さを演出することには成功している。結末はクラウレンやアーペル（アーペルはフケーの友人でもある）と同じ種明かしで終わるが、それは笑いをともなわない。ここにフケーの独創性を見てもいいかもしれない。

## 5. カロリーネ・ドゥ・ラ・モット・フケー「城塔の令嬢」

古城の幽霊をめぐる物語は、当時の狭い作家仲間のサークルでヴァリエーションを増やしていく。クライストの短篇の影響を強く受けた夫より先に、フケー夫人のカロリーネ（Caroline de la Motte Fouqué: 1775〜1831）も、「城塔の令嬢」（1811）を書いてこのジャンルに挑戦している。ちょうど夫が『ウンディーネ』を発表した年にあたる。戦闘（おそらく対ナポレオン戦争）によって二人の兄を失い、絶望から戦禍で荒れ果てた城館の塔に引きこもった貴族の令嬢の物語だが、幽霊物語の要素もあれば、戦争の時代相を背景に重苦しく陰鬱な冒頭から最後の最後で美男美女の結婚物語に回収される展開は、クラウレンの幽霊話とその種明かしのような趣も感じられなくはない。

遠くの硝煙ただよう戦場を見下ろす「北側に岩壁を背にして立つ塔」の一室に安全な場を求めた主人公クニグンデは、同じく戦火で森のなかの森林官の屋敷に居を移した小間使いの老女マルテの助けを借りて、細々と隠遁生活を続けることになった。だがクニグンデの寝起きする城塔の一室で、マルテの視線が落ち着かない。それはマルテの座る向かい側の壁に埋め込まれた「ヴェールを被った女性が描かれた石絵」が浮きあがって見えたからだ。マルテは令嬢にたびたび「じっと見てはいけません、絵をどうかそっとしてやってください」と警告していた。この絵に老女が城に住まず、森のなかの別の家から通ってくる理由もあった。

> 「お嬢様の平穏のためにけっして口に出したくなかったのですが、お嬢様が毎日どういう場所の近くでお暮しになっているのか。わたしに話せとおっしゃる以上、どうかお聞きください。あの石の絵の裏には壁に塗り込められた扉があり、小さな部屋につながっておりました。その部屋にかつて、もうだいぶだいぶ前のことですが、クララという名前の憐れなお嬢様が閉じ込められたのです。クララ様は父親のお付きの若者と貴族にふさわしくない恋愛関

係を育み、若者から離れられなくなってしまったからです。普段でもここの窓の前に立つと、はっきりクララと名前を呼ぶ声が聞こえるとみなが言うので、この部屋は乙女のクララの部屋と呼ばれ、わたしはもちろんみなもずっと気味悪く思ってきたのです。」[29]

この身分違いの恋によって娘に背負わされる罪は、後に夫フケーが「城の中庭の燈火」で借用したと考えてよいだろう。だが家族を失い天涯孤独になった主人公のクニグンデは、孤独な引きこもり生活の間、このクララの石の肖像画と対話することで無聊の慰めとした。世話係の老女が病気で通ってこなくなり、クニグンデは自ら城を出て森のなかの森林官の屋敷に行かざるをえなくなる。森の入り口で若い男に襲われそうになったところを、見知らぬ美男の猟師に助けられる。猟師は帰路も城まで同伴した。クニグンデは猟師の好意をありがたく思うものの、世間を知らない分、不安も隠し切れない。城の廃墟に近づけば、「宝飾品か、ほかのいい出物を物色する乞食の家族」、「その黄褐色の皮膚からジプシーと思われ」[30]る一団が火を囲んで騒々しく野宿をしていたので、猟師は見張りを申し出る。怖くなったクニグンデは神に不安を訴え、塔の自室の藁の寝台で寝入ってしまう。そこに霊が現れるのだが、カロリーネはここで「夢をみる（träumen）」という動詞を用い、クニグンデの視た夢として記述する。

しばらくすると彼女の夢に、灰色のヴェールを被った人影が現われ、窓辺に佇んでいた。しきりにその服で鉄製の頭帯を磨き、クニグンデの寝台に近づいてきた。その人物が歩くと、何世紀にもわたって積もった塵がヴェールから雲のように飛び散った。クニグンデの寝台に歩み寄ると、その人影は黄金のように輝く飾り輪で窓の方角を指し示すと、姿を消した。[31]

胸騒ぎがして朝眼覚めると、昨晩の雨のせいか、就寝前に窓辺に置いた飾り輪が水に濡れていた。この輪が後の展開でクララの運命とクニグンデの運命を対照的に結びつける役割を果たすのだが、ここではこれ以上立ち入らない。三晩にわたり同じ夢を見たクニグンデが月夜に寝台から起きると、窓の下に例の猟師の青年が犬たちを連れて来ているのを目撃する。クライストの犬といい、ここでも犬の鳴き声が、主人公を窓辺へと動かす契機をつくっている。夫のフケーも狩りと

猟犬というまったく同じ趣向を用いていることはすでに述べたとおりである。クニグンデは自分があの不幸なクララと同じ身分違いの恋に陥るのではという不安から、飾り輪を窓から投げ捨て、気絶してしまう。彼女は何週間にもわたり高熱を出して人事不省なまま病床での日々を過ごす。

クニグンデがようやく意識をとり戻すのは、晴れわたった花咲きほこる季節になってからだが、眼覚めると世界が一変している。敵は撃退され、再び国に平和な秩序がもたらされ、クニグンデの城に味方の連隊が行進してくる。その戦闘で指揮をとっていたのが、あの見知らぬ猟師の若者だった。彼はヘルマン・フォン・シュタウフェンという名の、亡くなった兄たちの戦友だった。彼は敵から身を隠すために猟師の姿で、森に隠れていたが、親友の妹を守るべくたえず見張っていたのである。彼はクニグンデが窓から投げ捨てた飾り輪を大事に持っていた。かくして「ありとあらゆる夢は今や夢ではなくなり、ありとあらゆる謎は解き明かされた。…村と城はクニグンデの愛に包まれ蘇り」[32]、クニグンデと後に退役する連隊長は結ばれ、城で平穏な生活を送ることになる。

カロリーネ・フケーの「城塔の令嬢」は、厳密な意味での幽霊物語ではない。夢に出てきてクニグンデを再三不安に陥れたクララの暗示的行動は、今なら潜在心理、あるいは強迫観念による幻影と解釈可能かもしれないが、小説全体で辻褄が合うように構成されている点でクラウレンの手法と変わらない。フケー夫人の書き方は、ロマンティックな情緒を、戦禍で胸を痛める女主人公や自然描写に投影しながら、陰鬱な心理を最後に晴れやかに救いだそうとするもので、それが女流作家らしい、とすれば昨今のジェンダー論的観点から批判を受けるかもしれない。だがテクストが示すのは、語り手がほぼクニグンデと一体化した視点から直線的に物語を進めていく構造である。女主人公が夢を視たのか、幽霊を見たのか、あえて曖昧に書かない戦略は、フケー夫人が幽霊物語の約束事の廃城を舞台に選びながら、恐怖の演出においては、幽霊の出現よりも、遠くの戦場の硝煙や森のなかで遭遇するならず者、勝手にたむろすジプシーの集団など、現実の危険の方に重点を置いたのである。

## 結びに代えて

ここまで一連の古城の幽霊譚のヴァリエーションを並べてみたが、はじめに

「ロカルノの女乞食」ありきではなく、「灰色の客間」を契機とする話型の変遷と捉えることもできる。さらにクラウレンは「灰色の客間」以上に凝った設定の「野盗(おいはぎ)の城」(1812)を発表している。こうした貴族の城館で起こる不可思議の物語の積み重ねのうえに、真打といえるE.T.A. ホフマンの古城綺譚「世襲領」(1817)が登場するのである。クライストの「ロカルノの女乞食」やホフマンの「世襲領」については多くの先行研究がありながら、同じ時代の空気を吸い、親しい間柄ではなかったもののホフマンとも面識のあったアーペルやクラウレン(=宮中顧問官ホイン)の短篇が等閑視されてきた事情については、「浅薄な」小説を考察に値しないと切り捨て、娯楽性に冷たい態度をとるドイツ文芸学の悪弊を指摘しておこう。それはさておき、アーペルとクラウレンの短篇がフランス人ジャン−バチスト・ブノワ・エーリエス(Jean-Baptiste Benoît Eyriès: 1767〜1846)の眼にとまり、『ファンタスマゴリアーナ』と題されたドイツ小説翻訳アンソロジーに収められて1812年に出版されたことは、世界文学史上の里程標のひとつに加えてもよいだろう。ナポレオン戦争後の1816年夏、ジュネーブ湖畔の別荘に集ったイギリスからの5名の客が、6月の長雨で外出もままならなかったおりに、退屈しのぎに手にとって読みはじめたのがこの翻訳だった。5名の客とはバイロン卿とその主治医だったジョン・ウィリアム・ポリドリ、パーシィ・ビィシュ・シェリーと後に妻となるメアリー・ゴドウィン、彼女の義理の妹クレア・クレアモントの面々だ。これなら自分たちの方が上手く書けると思ったのかどうかは定かでないが、この幻想作品集に触発され、各自が独自の物語を創作することになった。こういう経緯から生まれたのが、メアリー・シェリーの『フランケンシュタインまたは現代のプロメテウス』(1818)やポリドリの短篇「吸血鬼」(1819)である。

アーペルとクラウレンの短篇が、当時のフランス人訳者にとってはドイツにおける幽霊物語流行の証拠となる恰好の見本だったのかもしれない。『ファンタスマゴリアーナ』の序文には、啓蒙思想の本家であるフランス側のとまどいが見え隠れする。[33]ともあれ、現在の視点からすれば歯牙にもかからぬ「浅薄な」駄作であっても、思いがけない連関の一端を担う例としては無視できまい。本稿が古城幽霊譚の間テクスト性を研究する一助になれば幸いである。(了)

## 註

1 Heinrich von Kleist(Hrsg.): Berliner Abendblätter. Nachwort und Quellenregister von Helmut Sembdner. Wiesbaden: VMA-Verlag 1980, S.［10］.

2 Günter Blamberger: Heinrich von Kleist. Biographie. Berlin: Fischer Taschenbuch Verlag 2012, S.413.

3 Emil Staiger: Heinrich von Kleist, „Das Bettelweib von Locarno“. Zum Problem des dramatischen Stils.(1942) In: „Heinrich von Kleist“, hrsg. von Walter Müller-Seidel, S.113-129.

4 E.T.A.Hoffmann: Die Serapions-Brüder.［*Sämtliche Werke in sieben Bänden*, Band 4］, herausgegeben von Wulf Segebrecht unter Mitarbeit von Ursula Segebrecht. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 2001, S.1118f.

5 Gero von Wilpert: Die deutsche Gespenstergeschichte. Motiv – Form – Entwicklung. Stuttgart 1994, S.177.

6 創元推理文庫版『怪奇小説傑作集５』（東京創元社、1969年）はドイツ編とロシア編で一冊を構成するが、冒頭は植田敏郎訳の「ロカルノの女乞食」。種村季弘編集の河出文庫版『ドイツ怪談集』（河出書房新社、1988年）でも冒頭を飾っている。

7 Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe. Zweiter Band. Herausgegeben von Helmut Sembdner. Siebte, ergänzte und revidierte Auflage. München 1983, S.906. 文芸紙 „Der Freimüthige“ を『直言居士』と訳した理由についても触れておく。freimüthig という語は中高ドイツ語では「毅然とした、断乎たる」という意味で使われていたが、18世紀以降言語に結びつけられる形容詞として、「公明正大、率直な（offen）、とらわれない（frei）」という意味へと変化した。この形容詞の男性名詞化された形が雑誌名であり、「本音を語る人、忌憚なくものを言う人」というくらいの意味になる。「自由人」と訳している例も見かけるが、政治的な「自由」の概念とは関係のない言葉である以上、誤解を避けるために「直言居士」と訳した。

8 Ebenda.

9 佐藤恵三訳『クライスト全集　第一巻　小説・逸話・評論その他』、東京：沖積舎、1998年、154頁。

10 初出をめぐる情報は Apel, Laun, Clauren, Musäus: Die Sammlung Fantasmagoriana. Geisterbarbiere, Totenbräute und mordende Porträts. Mit Anmerkungen und einem Nachwort herausgegeben von Markus Bernauer. Berlin 2017, S.257 und S.260. なおオリジナルはGoogle Booksで参照できる。

11 識名章喜：「「野盗（おいはぎ）の城」と「アッシャー家の崩壊」―H. クラウレンとE. A. ポーをつないだ翻訳について―」、『藝文研究』第119号、2021年、（121）～（138）頁所収。

12 クラウレンの生涯については、Allgemeine Deutsche Biographieのメーリィの記

述„Clauren, Heinrich“ von Jacob Achilles Mähly in: Allgemeine Deutsche Biographie, herausgegeben von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Band 4 (1876), S. 281–282, Digitale Volltext-Ausgabe in Wikisource, URL: https://de.wikisource.org/w/index.php?title=ADB:Clauren,_Heinrich&oldid=- (Version vom 19. September 2021, 15:40 Uhr UTC)　さらにKindler Literaturlexikonの記述を参考にしている。

13 クラウレンの作品からの引用は以下の版によった。Apel, Laun, Clauren, Musäus: Die Sammlung Fantasmagoriana. Geisterbarbiere, Totenbräute und mordende Porträts. Mit Anmerkungen und einem Nachwort herausgegeben von Markus Bernauer. Berlin 2017, S.224.

14 Ebenda, S.225-226.

15 Ebenda, S.227.

16 アウグスト・アーペルの伝記的事実について簡単に触れておく。ライプツィヒの絹紡績工場主で市長にもなった父を持ち、クラウレン同様大学で法律を学び、博士号取得後、1796年からライプツィヒで弁護士として活動し、1801年には市会議員に選ばれた商業都市ライプツィヒを代表する名士。小説家・抒情詩人・劇作家・音楽研究家。フケーとは親しい交流があったが、ホフマンとは彼がライプツィヒを離れる10日前の1814年9月14日に知り合っている。ただホフマンは『幽霊綺譚』の作家に期待したようだが、日記には会って「不快にも失望した。アーペルは貴族相手のお上品な世界にとらわれている」と記している。E.T.A.Hoffmann: Tagebücher. Nach der Ausgabe Hans von Müllers mit Erläuterungen herausgegeben von Friedrich Schnapp. München: Winkler-Verlag 1971, S.255.

17 J.A.Apel & F.Laun: Gespensterbuch. 1811-1815. Vollständige Ausgabe. Herausgegeben von Matthias Wagner. Norderstedt: Bod 2017, S.146.

18 後半部からの引用は、前半部同様以下の版に収録されたテクストを用いた。Apel, Laun, Clauren, Musäus: Die Sammlung Fantasmagoriana. Geisterbarbiere, Totenbräute und mordende Porträts. Mit Anmerkungen und einem Nachwort herausgegeben von Markus Bernauer. Berlin 2017, S.241-249.

19 引用はベルナウアーの注釈によった。Apel, Laun, Clauren, Musäus: Die Sammlung Fantasmagoriana. Geisterbarbiere, Totenbräute und mordende Porträts. Mit Anmerkungen und einem Nachwort herausgegeben von Markus Bernauer. Berlin 2017, S.259f.

20 Ebenda, S.260.

21 *Der Freimüthige. Berlinisches Unterhaltungsblatt für gebildete unbefangene Leser.* Jg.1810, Nr 153(2.August), S.611f.

22 アーペル「黒い部屋」からの引用は以下のテクストにより、引用末尾の（　）内に頁数のみを示した。Johann August Apel & Friedrich Laun: Gespensterbuch. 1811-1815. Vollständige Ausgabe. Norderstedt: Bod 2017, S.146-152.

23 ロジェ・カイヨワ（三好郁朗訳）『妖精物語からSFへ』、東京：サンリオ（サンリオSF文庫）、1978年、15頁。

24 カイヨワ、前掲書、27頁および39頁。

25 Friedrich de la Motte Fouqué: Die Laterne im Schlosshofe. In: Friedrich de la Motte Fouqué : Romantische Erzählungen. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1985, S.241.

26 Ebenda, S.243.

27 Ebenda, S.242.

28 Ebenda, S.243.

29 カロリーネ・フケーの「城塔の令嬢」のテクストからの引用は、以下の版による。Caroline de la Motte Fouqué: Ausgewählte Werke. Band 1 Erzählungen und Lyrik. Mit einer Einführung zu Leben und Werk der Autorin von Petra Kabus. Hildesheim-Zürich-New York: Georg Olms Verlag 2003, S.69-108.

30 Ebenda, S.96.

31 Ebenda, S.99.

32 Ebenda, S.107.

33 仏語版『ファンタスマゴリアーナ』所収の短篇を原作で再現したのが、たびたび参照した以下の版である。ここではフランス語版序文の独訳を参照した。訳者のエーリエスは、当時のドイツで「宗派（セクト）」のようなものを形成した、幽霊の実在を信じるユング－シュティリングについて言及している。Apel, Laun, Clauren, Musäus: Die Sammlung Fantasmagoriana. Geisterbarbiere, Totenbräute und mordende Porträts. Mit Anmerkungen und einem Nachwort herausgegeben von Markus Bernauer. Berlin 2017, S.9f.